

一人一人が居心地の良さを感じられる学級づくり

～担任の働きかけと継続した SGE の実践を通して～

松井奈々（長崎大学大学院教育学研究科）

内野成美（長崎大学大学院教育学研究科）

I 本実践研究の背景と目的

文部科学省（2012）は、我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題の1つとして、「共生社会」を目指すこと挙げ、共生社会の形成に向けて「インクルーシブ教育システム」の理念を重要視している。また、この理念の構築のために、特別支援教育を着実に進めていく必要があると述べている。このようなことから、私たちはより多様で柔軟な生き方を求められていることがわかる。そうした中で、子どもたちがこれからの時代に求められる資質・能力を身に付け、かつ生涯にわたって能動的に学び続けるような力を育むためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが今後ますます重要となる（文部科学省、2018）。

このように、これからの学校教育には、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」という2つの取り組みが期待されている。河村（2018）は、これら2つの取り組みは別々で語られることが多いが、教室では一緒に展開されるとし、2つの取り組みがともに効果を上げるためには、学級集団づくりがその第一歩になると述べている。

しかし、子どもの現状として、小学校における暴力行為発生件数は2006年の調査時から継続して増加している（文部科学省、2019）。また、自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりするための語彙や表現力が乏しいことで、他者とのコミュニケーションがとれなかったり、他者との関係において容易にキレてしまったりする児童がいる現状があり（文部科学省、2011）、このような現状が先述した暴力行為の増加の一因となっていることが考えられる。このことから、学級の中で友達と関わりをもちながら、児童にとって居心地の良い空間をつくっていく必要性がさらに求められていると考えられる。

そこで本実践研究では、一人一人の児童が居心地の良さを感じられる学級づくりの手立てを明らかにすることを目的とした。

本実践研究における「居心地の良い学級」とは、①トラブルやいじめなどの不安がなくリラックスできている ②自分が級友から受け入れられ、考え方や感情が大切にされている、と感じられる2つの側面を学級の児童が同時に満たし

ている状態を指すこととする（河村、2015）。また、①が満たされている状態を、一定のルールが確立している状態、②が満たされている状態を、リレーションが確立している状態とし、①②の双方が確立している学級では、不登校やいじめ問題の発生が少なく、子ども個々の学級生活の満足感、学習意欲、友達関係を形成する意欲、学級活動に参加しようとする意欲、学力の定着度も有意に高いことを指摘している（河村、1998）。

ここで河村（1998）が述べている、ルールが確立している状態とは、児童が、表面に現れた行動ではなく、ルールの原理・原則や価値観に従って自発的にルールを守って行動する「ルールが内在化された状態」のことを指す。また、リレーションが確立している状態とは、児童が一定の人間関係だけに固着するのではなく、誰とでも建設的に関わることができる状態のことを指す。

本実践研究では、「居心地の良い学級」をこのように捉え、一人一人が居心地の良さを感じられる学級づくりのために、学級担任としてどのような働きかけができるのかを考察した。また、一人一人が居心地の良さを感じられる学級づくりのための1つの手立てとして、継続した構成的グループエンカウンターの実践を行い、その効果の検証も合わせて行った。

Ⅱ 本実践研究の方法

本実践研究では、全5回の実践研究実習を行った。その中で、一人一人が居心地の良さを感じられる学級づくりについて、①学級担任の児童に対する働きかけ ②継続的なSGEの実践の2つの視点から考察していくこととした。

まず、観察、学級担任へのインタビュー、QU（楽しい学級生活を送るためのアンケート）による質問紙調査などを総合し、学級の児童の実態を把握した。そして、そのアセスメント結果をもとに、学級集団や一人一人の児童の実態に合った学級担任の働きかけを考察し、SGEの活動を計画・実践した。

【対象】

① 長崎県N市内A小学校

1年生8名（男子4名、女子4名）、2年生8名（男子4名、女子4名）

計16名の複式学級

② 長崎県N市内B小学校2年A組（男子15名、女子11名）計26名

③ 長崎県N市内B小学校2年B組（男子12名、女子12名）計24名

【期間】

① 201X年4月～9月

② 201X年10月～201X+1年2月

③ 201X+1年4月～12月

Ⅲ 本実践研究の結果と考察

（1）学級担任の働きかけ

児童の実態を踏まえ、学級担任が学級の児童に対して、どのような働きかけをしているのか、その学級担任の働きかけに対して児童がどのような様子なのか、学級担任の働きかけにどのような効果があるのかについて、場面を挙げながら考察した。ここでは、そのうち5つの場面を取り上げて述べることにする。

【場面①】

→ 中休み後の体育の授業。授業が始まる前に、児童だけで準備体操を始める。

P1: 準備体操に加わらず、みんなから離れたところで砂を触っている。

私: (P1 に向かって)「どうしたの？」

P1: 「仲間に入れてくれんやったもん。体育もしたくない。」

T が運動場に現れると、T のところに言いに行く。

T: (P1 の話をきいた後に)「みんなの前で言ってごらん。」

P1: もじもじしながらなかなか言わない。

T: しばらく待った後、P1 に聞こえるくらいの声の大きさと P1 が言いたいことを代弁する。

P1: T が言ったことを後に続けて言う。

T: P1 が言ったことに付け加えてみんなにお話をし、授業に戻る。

(その後の児童の様子)

- ・ P1 は、みんなの前で自分の気持ちを伝えた後はいつも通り授業に加わっていた。表情などもいつもと変わらず、スッキリとした様子であった。周りの児童も、P1 といつも通り関わっていた。

P1 はなかなか自分の気持ちが言えず、それが行動に出ることが多かった。また、言えたとしても、自分の言いたい気持ちがなかなか周囲の児童に伝わらないことがしばしばあった。学級担任は、それを無視することなく、まずはきいてあげることが大切に行っているようであった。そして、みんなの前で自分の気持ちを伝える場を設けていた。P1 に限ったことではなく、どの児童も自分の考えや気持ちをみんなの前で伝える場を設けることは常に意識しているようであった。

【場面②】

T: 朝の会で、時間割変更のことを伝える。

P: 「え～」 「いや～」

T: 「P2、嫌なことを教えてください。」

P2: 何も言わない。

T: 「先生の嫌なことを言うね。まず、今先生がお話しているのに姿勢が悪い人がいることです。

そして、時間割変更があったときに「え～」 「いや～」とか言う人がいたことです。」

この場面では、「姿勢正しく話をききなさい。」「え～、いや～とか言いません。」などと直接指導するのではなく、学級担任の気持ちとして児童に話していた。このように学級担任が自らの気持ちを I メッセージとして話したり、実際に自らの気持ちを伝えたりすることによって、児童は指導されるよりも、学級担任の気持ちに共感しやすくなったのだと考える。また、児童が自らの言動で嫌な気持ちになる人がいることを知ることにより、話のきき方を形づけたり、相手の気持ちを考える態度を育てたりすることにつながったのではないかと考える。

【場面③】

→ 児童たちだけで宿題の答え合わせをした後、学級担任が話をする場面。

T:「P3、その席になって落ち着きましたね。P4もその席になって立派になりましたね。素敵なのが訪れそうですね。どの席に行っても素晴らしい人もいますよ。」

P3、P4:名前を呼ばれた瞬間、さらに背筋を伸ばし、Tの方をしっかりと見て話をきく。

T:「P5、気になります。〇〇先生も昨日言っていました。どうしてかな？先生は考えているんですよ。」

P5:机の上には物がたくさんあっており、手まぜをしている。名前を呼ばれた瞬間、学級担任の方を向き、苦笑いしながら頷く。

T:「伝わらないって思うことがあるんです。どうしたらいいかな？」

少し考える時間をとっている。

P6:「いらないものを出してるから手まぜしちゃうのだと思います。」

T:「すぐできそうだね。今日は授業参観の時にうちのの人に机の中まで全部見てもらいますよ。」

机の中を片づける時間をとる。

学級担任は、自身の観察の中で情報として得た「児童ができていること」をその場で伝えることにより、児童に成長を実感させているようであった。また、学級担任がみんなの前で児童の良さを伝える際は、一人一人に合わせたレベルで言葉かけをしていた。例えば、P3に対しては、話をきく場面で手まぜをしたり読書をしていたりなど落ち着かない場面が多かったため、手まぜをせず落ち着いて話をきいていることを取り上げて認めていた。また、いつでも話している人のほうを見て話をきくことが形づけられている児童については、「どの席に行っても素晴らしい人もいますよ。」と声掛けをすることにより、自分のことを見ていてくれているという安心感につながったのだと考える。

【場面④】

→ 朝、黒板にはハートの枠の中に「〇〇さん〇〇くん、絵を描くとき一生懸命集中していたね。その調子。」「〇〇くん、いつも一番！」「元気なさわやかあいさつ〇〇ちゃん！」と書かれている。(学級担任が、毎朝児童が登校する前に書いている。)

朝の会の先生からのお話の場面。

T:「みんなが知らないところで頑張っている人がたくさんいます。今日の自分より明日の自分が良くなるといいですね。見られるからするんじゃないよね。本当にいい人は、誰も言わなくてもできる人だね。」

(その後の児童の様子)

- ・ 誰も見ていないところでトイレのスリッパ並べをする児童が増えた。
- ・ 机からものが落ちた時、さりげなく拾ってあげる児童がいた。

これは、毎朝学級担任が行っていることであった。個人名をあげ、昨日頑張っていたことやいいところなどを書いていた。学級担任は、朝の会の先生からのお話の際に、これを取り上げたり、これに関連する話につなげたりしていた。児童は、このような学級担任の行動により、学級担任が見てくれているという喜びや安心感を抱き、自ら良い行動をしようとする場面が見られた。また、学級担任が学級全体に児童一人一人の良さを伝えることにより、児童が他の児童の良さに目を向けることができたのだと考える。

【場面⑤】

→ 前日、休みの児童に全員で手紙を書いた。今日、その児童のお母さんが連絡帳に「あたたかい気持ちになりました。」と書いてあったことを学級担任が児童たちに伝えている。

T:「あたたかかいてどういう意味？」

P:「心があたたかい。」(中略)

T:「みんな優しい心もっているの、言葉とか行動で表してくださいね。P7の名前には、優しいの漢字が入っていますね。優しくできていますか？今、先生がお話しているときにお話をするのは優しくないですよ。P7、優しくするってどういうこと？」

P7:「優しくするとは…」(自分の考えを発言)

T:「P7にはいいところがたくさんありますよね。お勉強する時は、どんな時でもハキハキと生き生きとしています。でも、時々落ち着かないことがあるのが心配です。」

P7:学級担任のほうを向き、話をきいている様子。

学級担任は、この場面以外の場面においても、保護者とお話したことや連絡帳でのやりとりを児童たちに伝える場面が多かった。また、この場面でもある

ように、他の先生が言われていたことを伝聞として児童たちに伝える場面も多かった。このように、学級担任だけでなく、周りの大人たちも児童たちのことをしっかりと見ていることを児童に伝え続けることにより、誰かが見ている安心感を児童が抱くことにつながったのではないかと考える。

また、学級担任は、どのような姿が好ましい言動なのかを具体的に示していた。そうすることにより、児童が今何を頑張るべきなのかが明確になり、実際の言動に移しやすくなったのではないかと考える。

(2) 継続した SGE の実践

① SGE の実践のねらい

SGE の実践を行った学級は、観察、学級担任へのインタビュー、QU による質問紙調査を分析した結果、全体として、自分の判断や選択に自信をもつことができない、周りの児童の反応が気になりなかなか自分の思いを表現できない、認められたい、見てほしい、知ってほしいという思いが強い傾向があることが分かった。

これを踏まえ、本実践研究での SGE の実践では、「自分の好ましい行動を肯定的に捉え、その行動に自信をもてるようにする」ことをねらいとした。そのため、特に「自己受容」を目的としたエクササイズを取り入れ、エクササイズを行っていく中で活動を行う人数を増やしていくことにより、関わりの幅を広げていくように計画した。

以上のような活動を通して、人から受け入れてもらう体験を積み重ねることで、「自分はこれでいいのだ」という「自己受容」の体験を経験することができ、自分を受け入れることができるようになるのではないかと考えたのである。そして、児童自身が学級集団での活動の中で、その経験を踏まえて、自分の思いを言い合うことができる学級の雰囲気をつくり、児童がともに関わり合っていく中で、自分のことも相手のことも認めることができる態度を育てることを目指した。

② SGE の活動内容

活動は、20 分を 1 セットとして毎週 1 回、計 10 回実施した。実施内容と実践する順番の計画は表 1 のとおりである。

表 1 SGE の実践計画

	内容	ねらい
1	『ねえ、どっちがいい?』	・喜びや安心感を感じる。・他者との違いに気付く。
2	『かおカードでお話しよう!』	・自然と相手の話に耳を傾ける。・気持ちよく自分の話をしたりきいたりしてもらえらる。
3	『パワーアップ! かおカードでお話しよう!』	・自分自身を見つめ、自分のことを知る。・相手をより身近に感じる。
4	『つづきをどうぞ』	・自己表現力を高める。・相手を受け入れ自分も受け入れられる。
5	『すごろくトークング』	・お互いのことを知る。・相手の話をきき、自分の話をきいてもらう。
6	『何考えてるかあててみて!』	・自分を受け入れてもらえらる。・友達の意外な面を発見する。
7	『4つのまど』	・自分と同じ考えの人がいることに気付く。・様々な捉え方や理由があることを知る。
8	『他己紹介をしよう!』	・相手の話に耳を傾ける。・相手が自分の話をきいてくれていることを実感する。
9	『なかまをさがそう!』	・協力し合う。・自分がこの学級の一員だということを改めて感じる。
10	『パチパチカード』	・友達の良さに気付く。・自分の良さに気付く。 ・お互いに認め合うことの喜びやあたたかさを感じる。

今回の SGE の実践では、SGE の実践の効果を検証するため、活動後、児童一人一人に振り返りシートを記入してもらった。振り返りシートの内容としては、実践ごとに児童と確認していた「3 つのお約束 ①相手が話している時には、しっかり話をききます。 ②相手が嫌だなど思うことをしません。言いません。③自分の正直な気持ちを大切にします。」をもとに作成した(図 1)。

また、児童がよりシェアリングを活発にできるよう、児童が書いた振り返りシートの記述を抜粋して掲示物を作成し、掲示した(図 2)。そして、児童が毎回の実践につながりを感じることができるように、その掲示物をもとに、毎回活動のはじめに前回の振り返りを行った。児童が書いた振り返りシートは、一人一人個人ファイルに蓄積し、児童が活動を思い出したり自分の成長を実感したりできるようにした。

図 1 振り返りシート

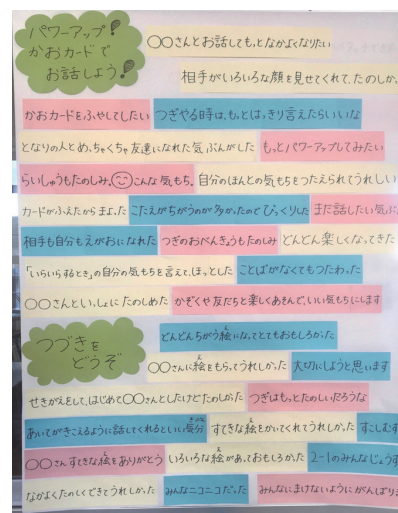


図 2 シェアリングのための掲示物

③ SGE の実践の成果

SGE の実践の効果を検証する方法として、SGE の活動の前後に QU による質問紙調査を行った(前:200X+1 年 9 月 10 日実施、後:200X+1 年 12 月 3 日実施)。

SGE の実践前後の QU の結果を比較すると、実施前と実施後では、友人 1「クラスの友達 はあなたに親切にしてくれる」という質問に関しては、実施後の方が平均値は実践前よりも有意に高かった(図 3)。また、学級の雰囲気の質問項目においても学級 1「あなたのクラスは明るくて楽しいですか」という質問に関しては実施後の方が有意に高かった(図 4)。

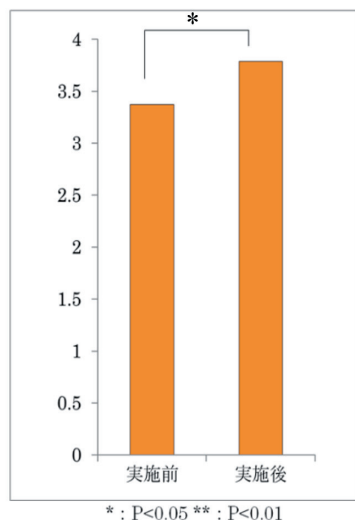


図3 「クラスの友達はあなたを大切にしてくれますか」

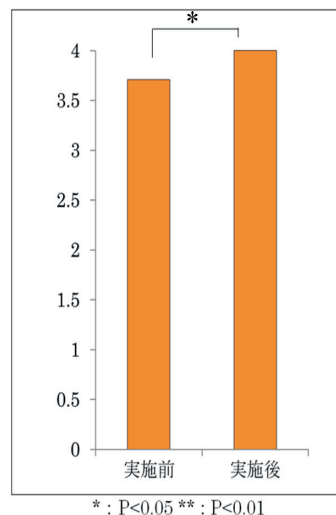


図4 「あなたのクラスは明るくて楽しいですか」

承認得点に関する質問の中の「あなたが失敗した時にクラスの人を励ましてくれることがありますか」においては、実施前に比べ実施後の方が、有意に平均値が高かった(図5)。また、同じく承認得点項目の質問の「友達はあなたの話をきいてくれますか」に関しては、他の項目と比べ平均点が高く、学級の児童が自分の話を友達がきいてくれると感じている様子が見えられた。

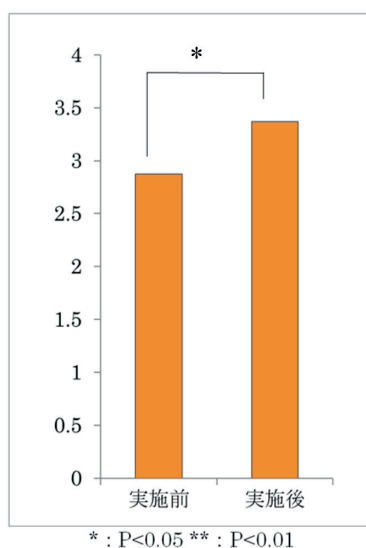


図5 「あなたが失敗した時にクラスの人を励ましてくれることがありますか」

IV 総合考察

(1) 学級担任の働きかけ

児童一人一人が居心地の良さを感じられる学級づくりのための学級担任の働きかけについて、今回は KJ 法の手法を参考にしつつ、現職教員を含む大学院生(5名)で、観察によって得られた学級担任の手立てを分類し、それをもとに以下の6つに整理した。

1) 気付きを促す

- ・ 児童同士がお互いの好ましい言動に目を向けるような言葉かけをしている。
 - ・ 児童の学びや成長を伝えている。
 - ・ 児童の良さをみんなの前で伝えている。
- 2) 考える場面をつくる
- ・ 問いかけをすることにより、児童に意見交換をさせている。
 - ・ 児童同士が話し合うことができる場を設けている。
- 3) 気持ちを共有する
- ・ 児童の気持ちを学級担任が言葉にしている。
 - ・ 学級担任が自らの気持ちを I メッセージとして話している。
- 4) 思いを受け止める
- ・ 児童が「したい！」と言ったことはさせている。
 - ・ 児童がみんなに思いを伝える場を設けている。
 - ・ 児童が発表をする場面で、「まだ言いたいことがある人はいませんか？」と問いかけをしている。
- 5) つなげる
- ・ 毎朝黒板に、児童が頑張っていたことやいいところなどを書いている。
 - ・ 保護者や他の先生方からの言葉を児童に紹介している。
 - ・ 毎日記入する連絡帳には今日頑張ったことなどを書かせている。
- 6) 見通しを立てる
- ・ 朝、1日の予定を確認している。
 - ・ 具体的な行動を示している。

(2) 継続した SGE の実践

実践を行った結果、振り返りシートの記述の中に、「どんどん楽しくなってきた。」「まだ話したい気分。」「来週も〇〇さんとお話するのが楽しみ。」「〇〇さんが笑ってくれて嬉しかった。」「ほかの人ともしてみたい。」などとあるように、児童が他の児童と向き合って話をする楽しさや友達のことを知る嬉しさを実感できるようになり、友達と関わることの楽しさや安心感を抱けたことがうかがえた。

また、今回の実践では、①相手が話している時には、しっかり話をききます。②相手が嫌だなと思うことをしません。言いません。③自分の正直な気持ちを大切にします。という3つのルールを児童と共有していたが、ルールを守られなかった時の嫌な気持ち、ルールを守ってもらえた時の嬉しさ、楽しさなどを感じて気付きに書いていた児童も多くみられた。ルールの1つである「話をきくこと」に関しては、最初は話をきく態度が上手に取れずにいた児童も、活動を行う中でどのようにきけばいいのかをつかめるようになっていった。

学級全体での活動の時は、振り返りシートの記述の中に、「24人みんなまでできて楽しかった。」「チームワークが良かった。」「2年B組のみんなはすごい。」とあるように、児童が、1つの学級集団として活動をしていく楽しさや、集団にいる喜びなどを感じられたようであった。

また、今まで自分の言動に自信がもてずにいた児童も、活動を重ねていく中で、「自分の

気持ちが出来てほっとした」という記述もあったように、自分の思いを伝えてそれが受け入れてもらえた時の安心感を抱くことができたり、表現することの楽しさを感じ、自ら積極的に発言したり友達と関わろうとする姿が見られたりした。このように、SGE の活動では、普段の授業や行事とは違った環境の中で、自己主張や自己表現をしやすくなる児童もいたようだった。

振り返りシートに関しては、毎回シェアリングをしながら行うことにより、記述する量や質が高まっていた。友達を感じたことや気付いたことを知ることによって、児童の視野が広がっていたのではないかと考える。

(1)(2)で述べたように、児童一人一人が居心地の良さを感じることができる学級づくりのためには、児童同士での関わりの中に建設的な相互作用が生起されるよう、学級担任が適切な支援をしていく必要があると本実践研究でも示された。

また、本実践研究では、実際に学級担任が児童へどのような働きかけを行っているのか、それによって児童がどのような反応をするのかを観察できた。そして、観察、学級担任へのインタビュー、児童への質問紙調査によって得られた情報をもとに、児童一人一人が居心地の良さを感じられる学級づくりのための学級担任の働きかけについて、整理することができた。

さらに、SGE の実践に関しては、児童の実態を総合的に把握し、それに応じた SGE の実践を継続的に行い、SGE の実践の効果を検討することができた。20分1セットという短時間で行うことができる SGE の実践を取り入れたため、学校現場でも活用しやすく、児童一人一人が居心地の良さを感じられる学級づくりの1つの手立てになる可能性があると考えられる。

V 主要参考文献

文部科学省．(2018)．小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説総則編．東京：東洋館出版社．

文部科学省初等中等教育分科会．(2012)．共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)．

文部科学省初等中等教育局児童生徒課．(2019)．平成 30 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について．

河村茂雄．(2015)．こうすれば学校教育の成果は上がる 課題分析で見つける次の一手！．東京：図書文化社．